ウインディー

WINDY STORY

泉優一

KADOKAWA NOVELS

グランプリ・チャンピオンの座を求めて
ヨーロッパを転戦する、日本人ロード・レーサー。
栄光と愛のオートバイ・ロマン

書下し

角川書店

カドカワノベルズ

昭和五十九年三月三十一日初版発行

著者　泉優二（いずみゆうじ）

発行者　角川春樹

ウインディー

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社大谷製本
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三　振替東京三-一九五二〇八
電話東京三六五-七一一一大代表　〒一〇二

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします

0293-776601-0946(0)

KADOKAWA NOVELS

ウインディー

泉優二

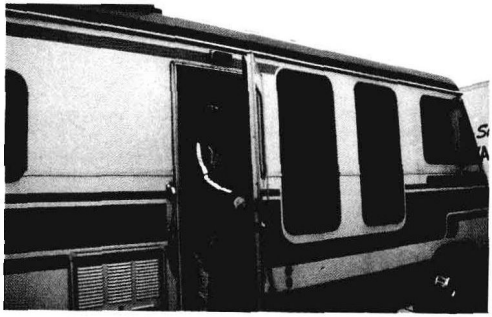
日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

カバー写真提供／東宝東和
本文イラスト／佐原輝夫

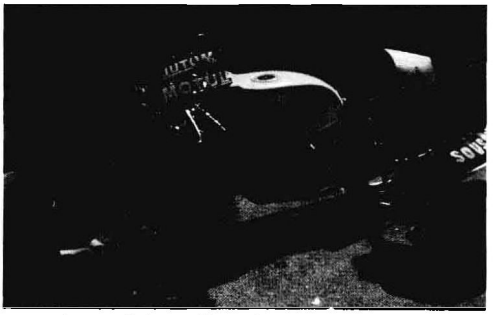
ワークスチームは快適に過ごせる大型バスやモーターホームを所有し、ライダー達に優雅なレース生活を提供している。



GPキング、ケニー・ロバーツと彼自身のデラックスなモーターホーム。

ワークスライダーはすべてをチームに任せて走るのみである。レースの合間に、自身のモーターホームの前で日光浴を楽しむ、GPキング、ケニー・ロバーツ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

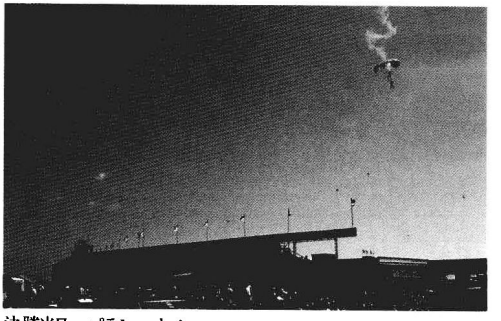


ワークスチームの華やかさに比べ、プライベーターはライダー自身がメカニックをつとめる事も少なくない。

そのプライベートチームとして日本から挑戦する池田直の整備風景。ライダーもメカニックとして働かなければならない。

資料提供
RIDERS CLUB

そして、ヘルパーは、生活を共にし、GPを転戦する家族がつとめる。



決勝当日、パラシュート・ショー。

レースの観戦とキャンピング生活を両方楽しもうという若者たち。

観客の大半はバイクでやってくる。

写真：泉 優二

ウインディー　目次

1 World Champion Ship 13

2 Crash 23

3 Winner 36

4 Love 49

5 Anna 64

6 Recovery 74

7 Helmunt 84

8 Come Back 92

9 Difficulties 110

10 All or Nothing 133

11 International Race 136

12 Masina & Sam 167

13 Vacance 206

14 Farewell 217

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

15 Separation 254
16 Meet Again 269
17 Continental Circus 276
18 KEI SUGIMOTO 311
片山敬済〈レースという人生〉 332
根本　健〈現代の戦士たち〉 334
特別資料〈ヨーロッパのモーターサイクル・レース〉 336
用語解説 341

モーターサイクル・ロード・レースを求めてヨーロッパ大陸を彷徨するライダー、そして苦楽をともにする妻、子供たち。

図らずもサーキットに散ったライダーにささげる。

1 World Champion Ship

えらく風の強い日だ。

しかしほこりっぽいという感じではまるでない。空は澄み切っていて、とても風をはらんでいるようには見えない。手をのばせばつかめそうに空は青い。

フィンランド、イマトラ、ここではいつもそんな景色に出逢う。

一九七三年世界選手権、ロード・レース・グランプリ第十一戦、フィンランドG・Pの決勝は明日に迫っていた。

予選中のエキゾースト・ノートが止むと、イマトラは本来の北欧の風や香りを取り戻していた。

リアル・ブルーの空を濃縮して溶かし込んだような湖から、ひんやりとした風がパドックにとどいている。

パドックは、公営の陸上競技場で、競技用トラックのインフィールドにはレーシング・マシーンの運搬用トラックやキャンピング・カーがひしめき合っている。

そろそろ夕食時で、八時を過ぎようとしているのに、パドックに夜はやってこない。白樺林を通して見える湖面はまだ輝いて美しい。

白夜の太陽を意識するのも、そんな一瞬だ。

杉本敬はキャンピング・カーの床に座って〝瞑想〟をしていた。

レース前はいつもそうだ。彼の姿はしかし、決して美しくも、〝無我の境地に達している〟などとも考えにくい。他人を寄せつけない空気を、それこそあたりかまわずまきちらしている。それは二十一歳になったばかりとは思えないほど強い。

時々眉間に皺が刻まれ、軽く閉じているつもりの瞼にも力が入る。短く刈り込んだ髪もそのたびに総毛立つ感じがする。

よく陽焼けしていて健康そうな肌、小づくりではあるが筋の通った鼻、唇は薄くしまっていて、眉毛は太くはなくシャープだ。

切れ長の眼は、神経質そうだし、虚栄心とか傲慢さが宿っているのが分かる。
しかし、それは誰もが若さゆえに持つことのできる程度のものだ。
敬の胃がぐっと縮む、眉間により皺が刻まれ、胃液が昇ってくる感じがする。陽焼けした顔がブロンズのように、いいあらわしにくい色に変わってゆく。
敬は、朝から食べものを口にしていない、その分だけ余計自分にいらいらしてメディテーションをするのだが、頭に明日のレースの展開が鮮やかに浮かびあがって来る。
〝無になれ、無になれ!!〟といいきかせているのだが、そう思えば思うほど深みにはまり込む。

十七歳、鈴鹿サーキットで開かれた、全日本選手権第三戦のノービス・クラス125ccレースにデビューして以来、二十歳で日本チャンピオンになるまで、敬はこれほどの苦渋を味わったことがない。
日本では彼の前を走ろう、という気を起こすライダーがいなかったからだ。

そして敬も十七歳から、日本でなく、世界を目標にしてきた。
彼にとってロード・レースの世界チャンピオンになることは、夢でなく現実的なものだった。
しかし、天性だけでトップを走れるほど、世界は甘くない。連戦につぐ連戦と、ヨーロッパ各国の慣れないサーキットを走ることは、日本のようなのんびりしたレースとまるでちがう。世界選手権ロード・レースは第一戦から始まって半年にわたって十〜十二レースをこなしていく。
その間にも世界選手権とは別に、インターナショナル・レースもこなしていく。
普通でも年間四十〜五十レースをこなすのだ。そしてライダーは、走るだけでなく、マネージメントから、コックまですべてひとりでやることになる。体力、気力、そして知性、なにからなにまでバランスがとれた人間だけが、チャンピオン・ドゥ・モンドのメダルを手に入れることができる。

敬がメディテーションを始めたのは、ヨーロッパ

に渡ってからのことだ。

プラクティスで彼は久しぶりの一列目ファースト・ローのポジションを得ていた。

ポール・ポジション、ジャコモ・アゴスチーニ、イタリアの英雄である。MVにまたがる。

セカンド・ポジション、セバスチャン・ガーナー、アエルマッキのワークス・ライダー。白のヘルメットに黒いストライプ、イギリス国籍、いつもすきとおった眼で冷たく、そして紳士的振舞いを得意としている。

だが突然敬のライディングを非難したりすることがあり、しまいには新聞記者の前で顔を赤くして本気で激昂してみせる。

ガーナーにとって敬のような新参者は歓迎できる相手ではない。高収入を得られるワークス・ライダーの席はきまった数、それも二十人といないのだ。

彼等ワークス・ライダーにとって、今年の成績がすべてであり〝来年に期待して下さい〟などという台詞は死語といってよいのだ。

それゆえ自らの地位を必死で守ろうとする。

今年のG・Pシリーズの中盤、敬はライバル・ライダーに身構えることをゆるすまもなく、彼等の横をすり抜けて走った。

トップ・ライダーたちは初参加の若者になぜ敗れたかを自己弁護する機会を何度か与えられるはめに落ち入ったわけだ。

敬はフランスG・PとオランダG・Pでファースト・チェッカーを受けている。

だが彼にとってこの二勝は、なにも特別のことではない、それよりその後、ベルギーとスウェーデンのグランプリを続けて転倒、あるいはリタイアしていることの方が苦痛の種であった。

敬はメディテーションしていることにやりきれない気持ちになって眼をひらいた。

フランソワーズが敬の顔を真剣に見つめていた。

敬の視線が彼女をとらえたので、フランソワーズはちょっぴり肩をすくめて笑ってみせた。

「なんで、他人の顔などまじめな顔して見てる必要

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong